

伝帝釈天立像

これは、ディーヴァ（サンスクリットで神）と呼ばれる、仏教の宇宙論上の階級存在の主である帝釈天の像だ。サンスクリット語では、インドラとチャクラとして知られ、他の名称の中でも、帝釈天はもともと仏教に守護神として組み込まれたヒンドゥー教の神であり、人間と神を悪から守る存在だった。帝釈天はまた、悪魔の力から東西南北を守る四天王を統治する。これらの王、持国天、増長天、広目天、多聞天は、像の台座に描かれている。

帝釈天の像は、おそらく金箔と漆で覆われていたと思われる。穏やかな表情、ふくよかな頬、浅い造形に基づいて、学者は平等院が建てられる前の11世紀前半に作られたと考えている。頭、肩、上腕はヒノキの一木から彫られ、袖と手は他の木片から作られている。空洞であるため、かつて仏教の宝物が入れられていた可能性がある。彫像のシンプルなデザインとは対照的に、台座は華やかに彫られている。台座はおそらく、彫像の全体的な美しさを高めるために、江戸時代に作られた。四天王が須弥山の住宅にいる様子が描かれている。須弥山とは、仏教とヒンドゥー教において、世界の中心に位置すると信じられている偉大な山のことである。